

食を基礎にしたコミュニケーションとしての大学

大学生協連会長理事 庄司興吉

食は、いうまでもなく私たちの生存の基礎である。私たちは生態系のなかで、動物や植物を食しつつ、みずからの生存を更新し続けている。食はこの意味で、呼吸とならんで、自然における人間の物質代謝（メタボリズム）の基本形態である。

食を基礎に広い意味でのコミュニケーションが成り立ち、家族や村や町が成立する。コミュニケーションの直接的な形態は身体と身体との交わりであり、それをつうじて世代更新もなされていくが、その過程で言語その他のシンボルが用いられ、コミュニケーションはしだいに高度な象徴操作（シンボリズム）に展開していく。食卓を準備し、ともに食事をしながら、生活に必要なことばかりでなく夢を語り合い、これからの家族ばかりでなく村や町のあり方を更新していくのが、人間の社会生活の基礎である。

その家族が多様化し、未婚や非婚が増えたり、離婚が増えたり、親がいても一人で食事する子どもが多くなってきた。大学生ともなると、朝食を取らないだけでなく、食生活に規則性のない者が増えているともいわれている。

個人の自由度が増してきているわけだから、家族のあり方が多様化し、女も男も、子どもも大人も高齢者も、いろいろ自由な生き方が可能になっていくこと自体は悪いことではない。しかし、メタボリズムを基礎にしたシンボリズムで、自然のなか、とくに生態系のなかに生きていくのが人間であることを意識し、新しい共同性をいかに創り出していくかを自覚的に考えないと、これからの社会は分解してしまいかねない。

食堂から出発し、購買や書籍や旅行やその他の教育研究補助に展開して、大学生活のメタボリズムを基礎にしたコミュニケーションを支えてきている大学生協は、そうした危機意識を学生と教職員の元気に変換しつつ、これからの社会のあり方を考えていきたいと思っている。

(Campus Life 21, 091115)